

聖書及びラビ思想における預言者エリヤ¹

ジョナサン・マゴネット
日原広志(訳)

預言書におけるエリヤ — 預言者の一人としてのエリヤの特異性 —

もし私たちが預言者とはどのように見えるものかについて予め一つの心像を持っているとすれば、それは恐らくエリヤの風貌に基づくものです。私たちの想像の中で、浮かんでくるのは、その顔が真っ黒に日焼けした、ぼろぼろの外套と腰巻を着た顎鬚を生やした男です。彼は荒れ野から一跨ぎで突然市場の中に現れます。彼は短気で怒りっぽいので、彼が話す時には私たちは聞いてあげなければなりません。社会に見出した不正に対する非難において、彼はひたむきです。もし私たちが彼の見解を受け入れるなら、私たちはそのような人物を神に酔った、そして当然のことながら人間の失敗に我慢できない〔タイプ〕²として考えるかも知れません。もし私たちが同意しないなら、私たちは彼を狂信者として退け、さしずめ今日であれば、私たちは宗教的確信の名において彼がすすんでやりかねない何かについて懸念を抱くことでしょう。彼は自分の民の誤った信仰と礼拝について辛辣で、祭司達と政治的指導者達による権力の誤用に怒っています。しかし社会に現れたと丁度同じ位突然に、彼は荒れ野へと退き姿を消すのです。そして私たちは残されて、この不思議な殆ど滑稽な人物を無視するか、それとも彼の怒れる — いつも怒っている — 神からまもなく私たちの上を下るらしい審判についての彼の

1 〔訳注〕これは2016年5月23日、西南学院大学大学博物館2階講堂で行われた神学部ロングチャペルでの公開講演である。原題は、“Elijah the Prophet in the Bible and Rabbinic Thought”。

2 訳注：〔 〕は訳者の挿入を示す。

メッセージに身震いするかのどちらかです。

上記の殆どは実際にエリヤに当てはまります。アハズヤ王は、外国の神々の一つからの託宣を求め〔に使者を派遣し〕た折、何者かが〔現われて〕非難する託宣を告げたという事実、そしてその男が極端に毛深い、毛衣を着て腰に革帯を締めていたという事実を〔使者から〕聞かされただけで、直ちにその人物を預言者エリヤと同定できた程です(列王記下1:6-8)。そうは言っても、聖書の記録の見地からすれば、エリヤは、そして彼の弟子のエリシャは、実際は例外的な人物なのです。もし私たちが自らの教示を記録化して遺した大預言者達を、少なくともヘブライ語聖書の中に私たちが彼らを受け止めてきた編集形態において見るなら、彼らは概して教養のある知的に洗練された思想家で、詩人であり、あるいは少なくとも高度に修辞技法に熟達している者達です。彼らが使信を語る時、彼らはエレミヤが神殿で説教したように、彼らが預言を語る権利を保証されている形式に則った状況においてそうしている可能性があります。聴衆にとって予想外であったり心をかき乱したりするかも知れないとしても、それは単に彼らの〔出現や語り出しに対してではなく、〕演説の内容だけが〔問題〕なのです。彼らはある研修プログラムの卒業生であることを示唆している“ハン・ナヴィー”「預言者」という一種の官名を持っていたようにも見えます。また彼らは神託に際して定型の導入句を使っています。世襲である祭司職とは異なり、何らそうした資格も預言者になるには適用されないように見えます。アモスだけは自らそのシステムの部外者であると主張しているので例外としても³、彼らは多分職業預言者の公的な同業組合のような何かのメンバーです。ある者達は、エレミヤやイザヤのように、神殿や宮殿の指導層にいつでもアクセスでき、彼らの社会の動力源に非常に近いところにいました。時々預言者達は何か奇怪な振る舞いを開陳したのも確かですが、これは巾広い聴衆へ瞬間的なコミュニ

3 訳注：アモス書7章14節でアモスは「わたしは預言者ではない。預言者の弟子でもない」と言っている。なお日本語聖書の引用は、特に断らないかぎり『聖書新共同訳』からのものである。

ケーションを取る手段を欠いていた社会の中で、最も劇的で力強い仕方、彼らのメッセージに関心を呼び起こすためでした。

そういうわけでいろいろとエリヤは例外的であるように思えます。明らかに彼は自分の弟子達を持っています。そして彼の背景のどこかで、彼もまた他の誰か一預言者の〔主宰する〕学校の卒業生か弟子であったかも知れません。彼は神託の定型導入句を使うことは殆どなく、単に公衆の面前で自らの正否を争うか、悪行をはたらく王を遠慮なしに告発するだけです。彼と弟子エリシャの両方とも、神の名において語る自らを権威づける方法として、かのフレーズ「私が仕えるイスラエルの神、主は生きておられる」をいくつかのバリエーションで使っています。(列王記上17：1；18：15；列王記下3：14；5：16)⁴しかしエリヤもエリシャも私たちの知る他の預言者達から彼等を区別する一つの賜物を持っています。どちらも奇跡行者であり、死人を生き返らせ、大勢の人々に食物を与え、川の水を二つに分けることが出来ます。彼等以前にはただモーセのみがそのような力を持っていました。そして彼等以後にはそうした能力を持った人々は消えてしまったか、そうした活動は無視されるようになったか、それとも権力によって抑圧されてしまったのか〔もはや登場しません〕。神のみに力と権威を限定することに関心のあったヘブライ語聖書にあって、奇跡行者というものは当惑を起こさせる存在だったのかも知れません。

エリヤが私たちの想像力に及ぼしている影響力は、他の預言者達の託宣がしばしば難解であるのに比べて、はるかに理解が容易で面白く味わうことができる彼についての伝説的物語に由来します。しかしこれもまたエリヤのキャラクターと彼の人生の出来事が描写されている手法によって、語り手の

4 両預言者とも誓いの定式においてそのフレーズを使用する。〔バリエーションは様々であり、〕エリヤは二度目(列王記上18：15)には神への言及を〔「イスラエルの神、主」から〕「万軍の主」に変えて用いており、エリシャ(列王記下3：14)もこれに倣う。またエリシャは単に「主は生きておられる」(列王記下5：16)〔の形式〕も用いる。

掌上に私たちがいるということの意味しています。そういうわけで私たちは、その語り手が私たちに提示するために何を選択しているかを研究する際に、私たちの批判的能力を使わなければなりません。

エリヤの熱情

エリヤの最初の登場は既に彼の振る舞いのパターンを指示しています。突然、警告なしに、彼はイスラエルの北王国の王アハブの前に現れ、そして宣告します。「わたしの仕えているイスラエルの神、主は生きておられる。わたしが告げるまで、数年の間、露も降りず、雨も降らないであろう。」(列王記上17: 1) 語り手は私たちにエリヤについて何ら予め情報を与えていませんでしたし、この王に対するメッセージをいつ神が彼に与えたのかについても彼〔語り手〕は示していないのです。私たちは聖書の預言者達の言明に信頼するよう慣らされているのですが、聖書そのものは私たちにそうした決めつけには慎重であるようにと警告しています。例えば、アハブ王が関与するもう一つの物語において、彼は戦争に行くべきか否かについて自分の宮廷預言者400人に相談します。彼らの全会一致の返答は、彼〔王〕は行くべきだということです。しかしそうした全会一致は少々疑わしいものです。そこで加えて王は預言者ミカヤに相談します。彼は最初彼の同僚達に同意するふりをしますが、とうとう戦争に行くことは〔王にとって〕命を喪う災難になるであろうということを認めます。彼は神からの偽りを言う霊がその宮廷預言者達全員に同じ事を言うよう仕向けていたのだと断言します。(列王記上22) ユダヤ教の伝統においてラビ達は「二人の預言者が同一のスタイルにおいて預言することはない」と教えます。真の預言者は各々、当然ユニークでなければなりません。エレミヤはしばしば「偽預言者達」と闘いました〔が、〕いかに彼らは仲間どうして託宣を盗み合っていることか! 〔と言って、〕彼らの振る舞いを非難しています。(エレミヤ23) 彼〔エレミヤ〕は自らこれもまた「預言者」の称号を与えられてるハナニヤと公開討論をしています。(エレミヤ28) 彼ら二人とも主の名によって語っていると主張するのです。

私たちがもしそこに居合わせたなら、どちらのメッセージを私たちは信じたことでしょうか？それでは〔話をエリヤに戻すと〕、真の預言者と偽の預言者をめぐる問題はヘブライ語聖書の関心事の一つです。語り手は神がエリヤに語りかけたと私たちに伝えていませんから、私たちは本当に事実なのかどうか知ることは出来ないのです。勿論彼の預言は過酷な早魃が後に続いた事で真実性を立証されます。しかし対照的に、その語り手は神がエリヤに早魃の終わるべき時を教えた場面については私たちに情報を与える程に注意深いのです。(列王記上18：1)

もし私がエリヤによるこの預言について疑問を提出しているとすれば、それは私がそれに関するラビの注釈によって影響を受けているためです。ラビ達はヘブライ語聖書を大変注意深く勉強しました。そして彼等は、彼等がこれは説明が必要だと感じる物語中に存する如何なるギャップに対しても敏感でした。このケースにおいて彼等は、何がエリヤを突然導いて神の名によって早魃を宣告するに至らせたのか理由を知りたいと欲し、そして彼等は、彼等の典型的な手法ですが、聖書の他の箇所から答えを探してきました。何が起こったかについての彼等の見解の中で、アハブ王は申命記を引用しつつ、エリヤを嘲っています。「モーセは“他の神々に仕えそれにひれ伏さぬよう、注意しなさい。さもないと、主の怒りがあなたたちに向かって燃え上がり、天を閉ざされるであろう。雨は降らず、大地は実りをもたらさないだろう”(申命記11：16-17)と言ったのではなかったか？」更にアハブ王は続けて「さてどうだ。私が礼拝しなかった偶像はないぞ。しかしそれでもまだ私たちは万事を楽しめている。全ては上手く行っており、好ましいまだ」と〔言って〕高ぶります。〔これに〕エリヤは余りにも激怒したので、〔神から託されてもいない〕早魃について彼の預言を思わず言い出してしまいました。神としても〔申命記において〕この警告をモーセに与えてしまっていた以上、エリヤが求めた通りに行う外の選択肢はなくなり、こうして神は早魃をもたらしたというのです。

これがエリヤをして語らしめた偶発的出来事〔をめぐる諸説の中で〕の唯一ありそうな解釈です。しかしそれはまた神の代理を買って出してしまうエリヤの熱情と、いかに神はそうした強烈な個性の持ち主とうまくやっていくかについて問題を扱っています。神の言葉〔が託される場面〕の先行を伴わないエリヤの突然の出現は、彼が、自らの神への大いなる情熱と熱心のあまり、事実上神の行為を先取りしてしまっている可能性を提示します。なぜなら自分は神が何を為すべきか知っている〔者である〕と彼は信じていたからです。そしてひとたびエリヤの預言が公に語られるや、神の名誉が問われることになるので、神は行動しなければならなかったのです。

同様の可能性はエリヤが王妃イゼベル側のバアルの預言者450人を向こうに回して起こしたかの大勝負〔カルメル山上の対決〕においても生じています。神は単にエリヤに「行って、アハブの前に姿を現せ。わたしはこの地の面に雨を降らせる。」(列王記上18：1)としか言っていませんので、エリヤが為すべきことの全ては、王を訪れることだけであり、そうすれば神が残りをするという手筈でした。しかし結局二人がついに相見えた時、アハブ王はエリヤに以下の言葉で挨拶をします、「お前か、イスラエルを煩わす者よ」(列王記上18：17)と。まさにこの時点で、エリヤは痲癩を起こしたように見えます。「わたしではなく、主の戒めを捨て、外国の神々バアルに従っているあなたとあなたの父の家こそ、イスラエルを煩わしている。」その後直ちにエリヤは王に全イスラエルとバアルの預言者達をカルメル山に召集するよう命じます。彼は王に伝えるべき早魃の終わりについてのメッセージの事など忘れてしまったかのように見えます。また神が彼にその勝負を行うように命じたという何の兆候もありません。

カルメル山上に二つの祭壇が築かれ、雄牛が屠られ、祭壇上に置かれました。試されるのはバアルか主、どちらの神が天から火を下してその犠牲を焼き尽くすことが出来るかです。バアルの預言者達は自傷行為まで含む彼等のあらゆる儀式的方法を駆使しますが、その甲斐無く、不首尾をエリヤに嘲笑

されます。さて今やエリヤの番です。彼が自分の欲したまさにその瞬間に天から火を呼び下すことが出来る筈だと決めてかかるのは余りにもリスクの高い企てと言えます。己が望む時に己が望む事を神にしてもらえるとということは大なる信仰あるいは自己過信を示しています。もちろん何が起るかを知っているのです、私たちは彼の成功を当然のこととみなすかも知れません。しかしエリヤ以前にはモーセだけが己が必要とする時にそうした超自然的、神的介入を保証してもらえると決めてかかることの出来〔る唯一の人間でし〕た。〔その〕モーセにとってさえ、そういう事は荒れ野の時代、モーセに対するコラハの反逆の時に、地が開いてダタンとアビラムを家族もろとも呑み込んだ場面で唯一度だけ生じたのでした。(民数記16) それどころか大抵の場合モーセは神が介入してくれることを期待しながら、自らの窮境について神に不平を言うのが関の山だったのです。預言者エレミヤは自分が最も神を必要とする時には、神は決してそこにおられない事を激しく嘆いていました。(エレミヤ15：18) その上さらに、火が天から降る先行事例は荒れ野で幕屋を奉献した時であり、それは神が選んだ時でした。多分同じ〔火を降す時は神が決める〕ことはまた聖所での儀式を誤った方法で遂行した廉でアロンの二人の息子ナダブとアビフを神の火が滅ぼしたその瞬間についても言えます。(レビ記9：23, 10：1-2)〔それ故、話を戻せば、〕エリヤはリスクの高い戦略を企てているのです。しかしもし天からの火そのものが十分〔な量〕でなかったら〔民は主への信頼を取り戻さないの〕で、おそらく神の力を証明する為に〔でしょう〕、エリヤは4つの瓶からの水で祭壇をびしょぬれにすることを各々3度繰り返すことによって更に難易度を高めます。私たちは神が“エリヤは一体次に何を考えるつもりか!”と訝っている様をまざまざと想像できます。多分エリヤは、早魃が終わろうとしていることを彼だけが知っていたので、自分は水を無駄遣い出来るのだということを伝えたかったのでしょう。

エリヤは神が返答してくれないかもと心配したのでしょうか?彼は、神の権威と全く同じくらい、預言者としての自身の評判を危険に晒しているのです、

彼の祈りの中にある程度必死さを見出すことは可能です。「アブラハム、イサク、イスラエルの神、主よ、あなたがイスラエルにおいて神であられること、またわたしがあなたの僕であって、これらすべてのことをあなたの御言葉によって行ったことが、今日明らかになりますように。わたしに答えてください。主よ、わたしに答えてください。そうすればこの民は、主よ、あなたが神であり、彼らの心を元に戻したのは、あなたであることを知るでしょう。」(列王記上18:36-37)すると実際に、火は天から降って来ました。エリヤが早魃を宣言したケースにおいてラビ達が示唆してきたように、またもや大変多くのもが賭けられてしまっていたので、神としては火を降らせる外の選択肢を持ちませんでした。そしてエリヤの言う通りに行い、別の方法を採らなかったのはまさに神なのです。

私はこれが普通ではない読み方であることを認識しています。しかし語り手が明らかにしているようにエリヤは折り合いをつけるのが難しい人物です。それでも彼は神と特別な関係にある者という、宗教的民間伝承ではお馴染みの種類の人物に属しています。両親が普通他の誰か〔がやったの〕であれば決して大目に見えないような振る舞いでも、〔その子がやった時だけ〕何の罰も受けないで済むことが出来そうな〔得な性格の〕子供たちというものが存在します。そうした子供たちは〔親の〕堪忍袋の緒が切れるまでに〔他の子供達と比して〕果てしない長さを要するところのある種の愛情深い甘やかし〔の待遇〕を喚起します。彼〔得な子〕の振る舞いに関するこの何か例外的なまでの〔両親の〕寛容さは、神とエリヤとの関係にも当てはまるように思えます。明らかに彼〔エリヤ〕は、少なくともある程度までは、神の目的に適っています。神が制限を設ける場面はホレブ山での彼らの出逢いにおいて確認されるでしょう。

エリヤの絶望

〔さて〕エリヤに自らの預言者達を殺害された王妃イゼベルは復讐すると

脅迫します。エリヤは自分の命が危ないと恐れます。彼はまた自分の民の姿勢を変えるとという使命に失敗したことで明らかに、もし臨床的に鬱病でないなら、深い絶望にありました。バアル預言者達が死んだ後で大きく〔轟いた〕彼ら〔民〕の確言「主こそ神です！主こそ神です！」も、何かが確実に変わったと彼に確信させ、安心させるものではなかったようです。事実、奇跡というものは瞬間的インパクトを与えることはあっても、まさにそれが例外的な事象であるとの理由で、心と精神に徹底的でより深い変革が起こされる必要がある場合には、殆ど影響力が持続しないのかも知れません。最悪の状況に至って、エリヤは神に自分の命を取ってくれとさえ願いました。(列王記上19：4) 一方所在をくらましている途中、彼はある天使によって食べ物を与えられます。そのことは彼にホレブと呼ばれる山への40日40夜の旅を続けるための力を与えます。そこはまさにモーセが最初に神から召命を受けた山でした。神はエリヤに尋ねます、「エリヤよ、ここで何をしているのか？」と。彼の返答は独善的怒り、苦悶そして絶望がごっちゃになっています。

「わたしは万軍の神、主に情熱を傾けて仕えてきました。ところが、イスラエルの人々はあなたとの契約を捨て、祭壇を破壊し、預言者たちを剣にかけて殺したのです。わたし一人だけが残り、彼らはこのわたしの命をも奪おうとねらっています。」(列王記上19：10)

彼が受け取った返答は単なる「燃える柴」ではなく、そのモーセに与えられたところよりもはるかにより偉大な神の力の現れでした。彼が目撃した台風のような風、地震そして火は自然の諸力に対する神の究極的統御について彼に新たに自信をもたせることを意図していたかも知れません。きっと預言者はこの体験によって、彼の訴えの正しさについても、神の必然的な勝利についても勇気づけられる筈です。これらの現象全ての後で「静かにささやく声」が臨みます。もし彼がそれを聞くことができるならば、多分ここにもエリヤへのメッセージがあります。天から火を呼び寄せる等の偉大な奇跡や、そして外国人預言者達の大量虐殺というものは、神がその中で真実に語りか

けるところのこの静寂ほどには効果的ではないのかも知れません。あるいはエリヤは、彼の教示の真実さについて民に確信させ、彼らの心を勝ち取るための新しい、より劇的でない戦略を必要としていました。おそらく神はこの劇的で名状し難い開示はエリヤを得心させるだろうと思っていたので、沈黙を破って再び尋ねます、「エリヤよ、ここで何をしているのか?」と。

私は学生達に聖書的物語の技法について教える時、私は彼らに反復があればそれに対して細心の注意を払うよう求めます。なぜなら類似章句二者間にある小さな変化の中にこそ、全体としての物語に関連する何かしばしば学ばれ得るからです。一つの好例はポティファルの妻とヨセフの間に起った事についての3つのバージョンです。(創世記39:10-18) 私たちは最初に語り手の説明を、それから彼女が自分の召使達に与えるバージョンを、そして最後に彼女が自分の夫に与える改訂版を手に入れます。語り手から私たちは出来事についての客観的説明あるいは少なくとも他の2つのバージョンを判断すべき基本線を受け取ります。明らかに彼女は本件における彼女自身の潔白とヨセフの罪を聴き手に説得させるべく、異なる聴衆それぞれにふさわしいバージョンを2つ〔作っています〕。そのように私たちがエリヤの神に対する新しい〔二度目の酷似した〕返答に出くわす時、私は学生たちに神顕現の前後で彼の言うことに差異があるかどうかをチェックするよう求めるわけです。彼らは単語同士を突き合わせながらヘブライ語本文を何度か読みますが、結局差異を発見できないことを認めざるを得ません。もちろん私の課題は少々アンフェアでした、なぜなら全く何の差異も存在せず、その二つの章句は同一だからです。しかしこのケースではまさしくそこが問題なのです。どうしてエリヤはそのように尋常ならざる神の力の開示を受けてもなお、その体験によっても全く変えられないままでいられたのでしょうか?皮肉なことに、エリヤが民の前で行った奇跡の開示と同様に、エリヤへの神の奇跡の開示もその預言者の精神を変えるには効果的でなかったかのように見えます!

神はエリヤの返答を彼の公式な辞意として受け止めたようです。神はそれから彼に2つの外交上の仕事を与えます、そのどちらもエリヤは自分で成就することはありませんでした⁵。しかしエリヤが始めた仕事は完成されねばならなかったので、神は彼に自身の後継者としてエリシャに油を注ぐよう命じます。最後に神はエリヤのあまりにも自分だけを義とする現状認識に対して意義深い修正を付け加えます。神は以下のように語り、実のところ彼は一人きりではないことを指摘します。「そして⁶、わたしはイスラエルに七千人を残す。これは皆、バアルにひざまずかず、これに口づけしなかった者である。」(列王記上19:18)

これはエリヤを励ますためでしょうか？あるいはそれよりも自分一人を除いては神になお忠実な民など誰もいないという彼の主張に対する批判でしょうか？後者の可能性がエリヤの姿勢についてのラビ的注解において取り上げられています。ラビ達はそうしたユダヤ民族に対する広範な批判に対してはたとえ聖書の預言者達に由来するものであろうとも敏感でした。彼らは神がエリヤの姿勢を快く思っていない証拠を物語の細部から、そして語呂合わせの手法によって引き出しました。エリヤがイゼベルから逃亡した時、彼はえにしだの木の下で眠り、それから目を覚ますと彼が食べるために用意されたパン菓子を見つけます。(列王記上19:6) そのパン菓子はヘブライ語で“ウガト レツァフィーム”「熱い炭(レツァフィーム)で焼いたパン菓子(ウガー)」です。ラビ達はその単語“レツァフィーム”をもう一つのヘブライ語単語“リツパー”(真っ赤に焼けた炭)と結びつけ、そしてこのことからそれらをイザヤ書6章と、すなわち、高く天にある御座に座す神についての預言者の幻を報告する物語と結びつけました。神を見てしまうという当時禁忌とされた行為の故に、絶望と恐れに囚われたイザヤは、「災いだ。わたしは滅ぼされる。わたしは汚れた唇の者。汚れた唇の民の中に住む者。しかも、

5 【外交上の仕事の】一つはアラムの王としてハザエルに油を注ぐことであり、これはエリシャが自分で行った。もう一つはイスラエルの将来の王としてイエフに油を注ぐことであり、これはエリシャが自分の代理を派遣する形で行った。

6 訳注 講演者による。新共同訳は「しかし」。

わたしの目は／王なる万軍の主を仰ぎ見た。」と言いました。しかしあるセラフ— 神の僕 — が祭壇から火鉢で真っ赤に焼けた炭（リツパー）を取って、預言者の口にそれを触れさせて、「あなたの咎は取り去られ、罪は赦された」（イザヤ6：7）と言うのです。しかし何故— とラビ達は尋ねます— かの預言者の唇を清めるのにそのような苦痛に満ちた方法を用いるのだろうか？ エリヤのケースがそうであるように、ラビ達はイザヤを預言において彼の民に余りにも苛酷な審判を告げた廉で非難しました。そうして彼らはイザヤの唇に触れた熱い炭と、エリヤに与えられた「熱い炭のパン菓子」を、民の名誉を毀損したことへの一種の刑罰として解釈しました。こうするために彼らは単語“リツパー”（真っ赤に焼けた炭）を二つの単語に分割しました。すなわち動詞“ラツァツ”— その意味は「粉碎する」— と名詞“ペー”— その意味は「口」— にです。己が口を用いて民の名誉を毀損したために、両預言者共その口にぞっとするような一撃を受けたのです！〔このように〕繰り返しラビ達は彼らの言語学的スキルと想像力を用いて、彼らが聖書本文の中に暗示されていると考えるところの理念を劇的に表現してきたのです。

このエリヤの姿勢に対するラビ的批判は、男児の生後八日目に行われるユダヤ教の割礼の儀式に登場するところのある重要な象徴的アイテムへとつながりました。エリヤは「イスラエルの子らはあなたとの契約を捨ててしまった」と主張しました。（列王記上19：10, 14）私たちが既に注目したように、神は事実上その時にエリヤに反駁していました。しかしラビ達は彼の見解に対してより劇的な返答をしました。「契約」を意味するヘブライ語の単語は“ベリート”です。そして「割礼の儀式“ベリート ミッター”」のために使われるのはまさに同じ単語です。儀式の一部で「エリヤの椅子」と呼ばれる椅子が置かれます。なぜなら彼はその儀式に出席することが期待されているからです。そうした椅子を登場させることはエリヤを賓客として遇しているように思われます。しかし、それはまた彼への罰として理解されることも可能です。神の契約を棄てたと言ってイスラエルを名誉棄損したせいで、エリヤは、世界のどこかで、契約のしるしたる割礼が行われる度に、毎回毎回

証人として出席しなければならないのです！

聖書の物語に戻って、神はエリヤの言葉を公式な辞意と解釈したようで、彼に以下の言葉を告げて暇を出します。“レフ シューヴ レ・ダルケハー”「行け！帰れ。あなたの自身の道へ…」預言者であったとしても、また、たとえ皆さんが、その仕事は自分には余りにも厳し過ぎるので、続けるよりも死んだ方がましだと不平を言う場合でさえ、誰も仕事を解雇されるのは好きではありません。エリヤが彼の後継者となるエリシャをその最初の出会いに際して扱ったその仕方によって判断するに、エリヤは解雇されて少しも幸せそうではありません。「エリヤはそこをたち、十二軛の牛を前に行かせて畑を耕しているシャファトの子エリシャに出会った。エリシャは、その十二番目の牛と共にいた。エリヤはそのそばを通り過ぎるとき、自分の外套を彼に投げかけた。」(列王記上19：19) このエリヤによる行為はしばしば「彼は彼の上に自分の外套を投げかけた」と翻訳され、エリシャを自分の後継者として指名する正式な作法として理解されます。しかしヘブライ語は文字通りには「彼の外套を彼に投げ与えた」であり、はるかにずっとぶっきらぼうで相反する感情のこもった行為であることを暗示しています。しかしいかなる説明の欠如にも関わらず、どういうわけかエリシャは自分が召されているメッセージとして受け取ります。「エリシャは牛を捨てて、エリヤの後を追ひ、『わたしの父、わたしの母に別れの接吻をさせてください。それからあなたに従います』と言った。」(列王記上19：20a) しかしエリヤは（彼を解雇する時に神が用いたのと全く同一の言葉を用いつつ！）言うのです，“レフ シューヴ”「行け！帰れ…。わたしがあなたに何をしたというのか？」と⁸。エリシャは、しかしこれを家族に別れの挨拶を言うことへの許可として受け取ります。「エリシャはエリヤを残して帰ると、一軛の牛を取って屠り、牛の装具を燃やしてその肉を煮、人々に振る舞って食べさせた。それから彼は

7 訳注 講演者による。新共同訳では「行け、あなたの来た道を引き返し、」であり、預言者の職務を解雇されたニュアンスは感じられない。

8 訳注 講演者による。新共同訳の20節bは「エリヤは答えた。『行って来なさい。わたしがあなたに何をしたというのか』と。」である。

立ってエリヤに従い、彼に仕えた。」(列王記上19：21)

聖書本文の順番についてのラビ的観察に“アイン ムクダーム ウ・メウ ハール バ・トーラー”文字通りには「聖書には前も後もなし」というのがあります。この文学的注釈によって彼等が意味しているのは、本文が聖書の中に現れるその順序は実際に起こった順には構成されていない可能性があるということです。その代わりに、例えば特殊な主題を続けたいとか、あるいは章句間の単語の結びつき等の理由で、異なる基準が時々使われることがあります。しかしもし私たちが列王記の出来事の配列に従うなら、エリヤは引退後に2つの出来事で神によって彼の引退先から呼び出されています。一度目はアハブ王と再び対決し彼と彼の家、そして王妃イゼベルの破滅を予告するためです。(列王記上21：17-29) ここでもエリヤは神が彼に実際に語ったものよりかなり多い内容を付け加えて語っています。もう一つのケースは、病の進行から死にかけていたアハブの子アハズヤ王に対してメッセージを与えるためでした。その王はエリヤを自らの許に連れて来させるべく部隊を派遣しますが、エリヤは脅威に晒されていると感じて、二度に亘って天から火を降して彼等を焼き殺しました。この時の彼の行為はいかなる宗教的見地からも正当化され得ないものですが、明らかに彼は年老いてなお力を喪っていませんでした。(列王記下1)

エリヤの天への引き上げ

彼〔エリヤ〕の最後の旅の時が迫っている時、エリヤと他所の町に住む彼の弟子達はそれに気づきます。エリヤのエリヤについてのも相対する感情はこの最後の遭遇においてもおそらく確認できます。彼等と一緒にギルガルを出発しますが、エリヤはエリヤに「主はわたしをベテルにまでお遣わしになるが、あなたはここにとどまっていなさい」と言います。代わりにエリヤは「主は生きておられ、あなた御自身も生きておられます。わたしはあなたを離れません！」と誓いを立てます。エリヤが自分の許から去ろうと

しないのが明らかになったので、エリヤは主がこれから自分をエリコに遣わすところなのだ主張して、再度〔エリシャと別れようと〕試みます。しかしエリシャは同じ誓いをして彼に随行することに固執し、彼等は共にエリコに行きました。エリヤは三度試みます。今度はヨルダン川へ向かう時でした。しかし再びエリシャは彼と共に留まります。エリシャを追い払うことは出来ないと理解して、エリヤは自分の外套でヨルダン川の水を分け、彼等は一緒に渡河します。エリヤはエリシャに「わたしがあなたのもとから取り去られる前に、あなたのために何をしようか。何なりと願いなさい」と尋ねます。(列王記下2:9) エリシャは「あなたの霊の二つの分をわたしに受け継がせてください」と求めます。このフレーズの背景には、長子が父の二倍の相続分を受け取る伝統があるかも知れません。そのようにエリシャはエリヤの後継者として確証されることを求めています。おそらくエリヤが乗り気でないのは、他の誰かを任命したいという彼の希望か、神が彼にエリシャを選ばせたそのやり方に対する鬱積した立腹を反映しています。しかし彼の返答は単に、もしエリヤが彼の要求を叶えたなら〔その時〕エリシャが獲得することになる力の危険性についての警告だったのかも知れません⁹。「あなたはむずかしい願いをする。わたしがあなたのもとから取り去られるのをあなたが見れば、願いはかなえられる。もし見なければ、願いはかなえられない。」(列王記下2:10) 彼らが話しながら歩き続けていると、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、二人の間を分けました。エリヤは嵐の中を天に上って行きます。聖書本文に従えば、彼を運び去ったのは嵐であって火の戦車ではありません(cf. 列王記下2:1, 11)。もし火の戦車がまさに最後の瞬間にエリシャを引き離すことを意図していたとしたら、どのようなメッセージをそれは伝えるのでしょうか？火が己の奇跡的力にふさわしい暴力的表象であるエリヤに

9 エリシャは実際エリヤの霊の二つの分を受け取ったので、ヨルダン川の水を二つに分けることに始まり、同じ奇跡のいくつかを繰り返した。しかし彼の力は、ある子どもたちによってからかわれた時、彼による放言がどこからともなく熊を出現させ、彼等を殺さしてしまうというそのようなものであった。その時以来、エリシャは自分の僕や使者を仲介人として用いることで、慎重に民との直接的接触を避けるようになっていった。

とって、火の戦車はエリシャの気をそらすには好都合でした。しかしこの種の激しい振る舞いは演じるべき異なる役割を持っていたエリシャの流儀にはなり得ません。もし彼が火の戦車によって気をそらされ、その〔エリヤ的〕使命についていくよう誘惑されたとしたら、それは彼自身の個人的性格と仕事に影響を及ぼしたことでしょう。その代わりにエリシャは何が本当に起こったかを見ることができました。彼〔エリヤ〕から落ちたエリヤの外套を回収し、そして今や彼〔エリシャ〕の決められた席についたのです。

エリヤの奇跡的で劇的な天への出発は突然現れ、そして突然消えることを常とするような人物にはふさわしいものです。しかしそれ〔天へ引き上げられた事〕はその預言者の全く新しい余生を開拓することになりました。預言者マラキの章句（3：22-24）を皮切りに、彼はユダヤ教の伝統においてもキリスト教の伝統においてもメシアの到来を先触れする者となっていきます。私たちがいくつかの事例に注目してきたように、ラビ達は聖書物語内のエリヤの振る舞いを批判してきました。しかしユダヤ教の伝統における彼は、この新しい余生の中で極端な変容を経験します。聖書物語の中の、何をしでかすか分からない危険な性格の代わりに、彼はユダヤ民族の恵み深い案内人、支え手そして友となります。彼はそこで訴訟についての議論と紛争をラビ的知者達が解決するのを手伝います。時々彼は彼等と分け合うために天から秘密をもたらすことさえあります。彼は彼ら〔貧しい人々〕に必要なものを不思議な形で供給することで、貧しい人々の生活を救います。しかし彼はまた、もし彼ら〔富める者〕が他者のために自らの富を使わないようなら、富める者を再教育します。彼はユダヤ民族が困っている時に介入するために多くの外観で現れます。事実、あなたが遭遇する何らかの見知らぬ人は本当は変装したエリヤであるかも知れません。ユダヤ教の祭儀的生活においては、割礼の儀式に出席するのと同様に、過越祭の食事に参加できるようにと、彼のために〔ワインが〕注がれる杯があります。そしてメシアが実際に来るかもしれない時である、安息日の終わりを示す短い礼拝においては、彼を祝福する歌があります。

私たちはエリヤについての聖書物語のいくつかを扱ってきました。そこで〔本講演を〕エリヤを最も良く知っていたにちがいない人物、すなわち彼の弟子エリシャによって与えられたあの不可思議な死亡者略歴 (obituary) で以て終えるのは相応しいことです。エリヤが出発するまさにその瞬間、彼は叫びます。「わが父よ、わが父よ、イスラエルの戦車よ、その騎兵よ！」(列王記下 2 : 12)¹⁰。多分彼は、エリヤこそ彼自身の特異なそして時々問題は問題あるやり方で、彼の民の魂を神に向かって取り戻すために戦い続けた真なる唯一の兵士であったということを言わんとしていたのでしょう。

10 これと全く同じ言い回しはエリシャ臨終の際にヨアシユ王によっても語られている。(列王記下 13 : 14)